

近世ならび近代初期の建築用語に関する基礎的調査研究

主査 源 愛日児¹

委員 中谷 礼仁^{*2}, 西尾 清^{*3}, 初田 亨^{*4}, 三浦 清史^{*5}

多くのヴァリエーションを含みつつ建築を記述してきた近世近代初期の多様な建築用語が、近代化過程の中で術語としてあるものは整理され、あるものは顧みられなくなっていった。本調査研究は、それらの近世、近代初期の建築用語を拾遺し、その基礎資料を作ることを目的としている。その結果、7篇の近世大工書を電子テキスト化し（これまでの研究分を含め23篇）、450余の用語のデータベースを作成することが出来た。

キーワード：1) 建築用語, 2) 日本建築, 3) 近世, 4) 近代初期, 5) 大工書,
6) 日本建築辞彙, 7) 職人, 9) 技術, 10) データベース

FUNDAMENTAL RESEARCH ON THE TERMINOLOGY OF ARCHITECTURE AND CARPENTRY IN EARLY MODERN AND MEIJI PERIOD JAPAN

Ch. Aihiko Minamoto,

Mem. Norihito Nakatani, Kiyoshi Nishio, Toru Hatsuda and Kiyofumi Miura

The aims of this research is to collect material about the terminology used in the fields of architecture and carpentry from the end of 16th century to the beginning of the 20th and create a body of basic research material recorded on computer. So far, we have recorded on computer 23 pre-modern carpentry manuals (7 with the foundation's support) and compiled in a computerised database 450 terms whose meanings have been lost or changed through modernization.

1 はじめに

1.1 研究の目的

要約に記したように、近世、近代初期の多くの用語が、建築学の発達に伴う建築用語の整序と共に遺棄されてきた。『日本建築辞彙』（中村達太郎、明治39、1906年）は、近世、近代初期の職人の中での「通用語」たる建築用語を広範な領域から蒐集、解説したもので、しかも戦後に及んで尚、改訂、増補を経ながら版を重ねたものであり、その後、今日に至るまで、建築辞典、国語辞典等の辞典類への影響は明白である。しかし、その一方『日本建築辞彙』の見出しにある用語、4000語弱のうち、500語弱が『建築大辞典』の見出し語から除外されている（ただし、その中には一方が、熟語を分解して解説しているために除外されている例もある…入中墨→入中、入母屋→入母屋屋根など）。

すなわち、『日本建築辞彙』が、長年の使用に耐えてきたことから、近世用語を近代の建築用語へと整序する

役割を直接、間接に担ってきたことが推測される一方、その八分の一もの用語が『建築大辞典』において削除されていることによって、いかにも近世、近代初期的な職人用語であって今日から見れば標準的でない用語をも蒐集した辞典であったかを、伺い知ることが出来る。更に、この『日本建築辞彙』にしても、用語の取捨選択において、職人の通用語に限ってすら、多くの用語を省かざるを得なかったに違いない。

例えば、『今西氏家船繩墨私記 乾』（今西幸蔵、文化10、1813年）の復刻、『家船心得集』（生活史研究所、1985年）や、『日本建築古典叢書3 近世建築書-堂宮雛形2 建仁寺流』（河田克博、1988年、大龍堂書店）など、近世大工書を紹介する文献に付された用語注解に目を向けるなら、「拭留」「面打」「目中窓」「堀樋」「差戸」（『家船心得集』）「円座木」「目返」「のべかね」「いかり」「へぎ定規」（『日本建築古典叢書3』）など、『日本建築辞彙』の見出しにない用語（これ

*1 武蔵野美術大学 教授
*4 工学院大学 教授

*2 大阪市立大学 専任講師
*5 こうだ建築設計事務所

*3 西尾石材店

らは『建築大辞典』でも見出し語にない)に容易に行き当る程である。

以上の例からも、多くの近世・近代初期の建築用語が全体として取上げられることなく、上記のように、大工書などの注解に個別に扱われているに過ぎず、その全体像の解明の進んでいないことが推測できる。そこで、本調査研究は、先ず用語研究の布石として、大工書等にあられた用語を拾遺することを、一義的な目的とした。このような工匠用語に関する基礎資料の蓄積が、将来様々なテーマの近世・近代初期の建築研究や保存改修などの実践的な場面に資することは議論の余地のないところであろう。

以下では、先ず、どのような方法によって調査研究をすすめる、それをどのような形式に蒐集保存し、それをデータベース化しているかを報告する。本調査研究は特定のテーマのもとでの建築的事象の読解、分析ではないので、そうした意味の特定の結論が得られるものではない。また、得られた個々別々のデータの全てを並列に紹介することも、分量的に不可能である。そこで、次章以下では、近世大工書のテキスト化、職人への聴取、用語のデータベースを作成する中で出会った、興味深い幾つかの事例を紹介することによって、本調査研究の成果の一端の報告としたい。

1.2 研究方法

1) 先ず、近世・近代初期の大工書を中心とする文書の蒐集、次にそれら大工書の読解を通して建築用語の蒐集を行った。用語の検索、抽出などに適した形式であるとの理由から、大工書は電子テキスト化を行った。電子テキスト化は、文脈の中での語義が重要となるものは、大工書自体の電子テキスト化を計り、往來物や図版主体の大工書については表形式での電子テキスト化を行った。後者が、抽出、ソートなどには一層有効な形式ではあるが、前者については、表形式に表しにくく、上記のような判断とした。ただし、実際は、入力を終えた全ての大工書がこの方針通りに電子テキスト化しているのではなく、文脈を重視すべき大工書を、用語に分解して表に入力したものもある。

以下は、電子テキスト化した、27タイトルの大工書の一覧である。

『匠明』(平内政信、慶長13,1608年)【伊藤要太郎校訂、匠明、鹿島出版会、1971】

『武家雛形』(底本：瀬川政重、明暦元,1655年)【伊藤平左工門校訂、武家雛形】

○『教寄屋工法集』(伊藤景治、貞享3,1686年)

○『匠家極秘伝 乾坤』(広丹農父、享保12,1727年)

『秘伝書図解』(西村権右衛門、享保12,1727年)

『匠家仕口雛形』(甲良棟利、享保13,1728年)

『御作事方仕口之図』(甲良宗員、享保14,1729年)

○『新撰大工雛形』(木暮甚七、宝暦7,1757年)

○『増補 紙上墨氣』(溝口若狭林卿、宝暦8,1758年、増補 寛政2,1790年)

○『方圓順度』(溝口林卿、天明8,1788年)

『継目仕口扣』(辻内(飛驒竝昌)、寛政5,1793年)

【若山滋、麓和善、日本建築古典叢書8、大龍堂、1993】

『御殿向作事堅図解』(筆写本、江戸時代後期)【若山滋、麓和善、日本建築古典叢書8、大龍堂、1993】

『大工雛形 規矩鑑集 蒂指口』(若杉家、寛政末年、1800年頃)【若山滋、麓和善、日本建築古典叢書8、大龍堂、1993】

『今西氏家船繩墨 私記 乾』(今西幸蔵、文化10,1813年)【家船心得集、生活史研究所、1985】

『蒂指図』(大沢貞頼、文化13,1816年以降)【若山滋、麓和善、日本建築古典叢書8、大龍堂、1993】

『万宝柱立番匠往來 全』(東里山人、文政6,1823年)

『匠家矩術要解』(平内廷臣、天保4,1833年)

『匠家矩術新書』(平内廷臣、嘉永元年,1848年)

『番匠作事往來』(整軒玄魚校、大賀範圍図、嘉永,1850年頃)

『独稽古隅矩雛形』(小林源蔵、安政4,1857年)

『工匠技術之懐』(河合信次、明治15,1882年)

○『土蔵戸前雛形』(猿田長司、明治,1882年)

○『日本建築規矩術』(斎藤兵次郎、明治37,1904年)

このうち、○印を記したものが7タイトルが、本年度調査研究によるもので、他はそれ以前に、電子テキスト化をすすめていたものである。また【】印を記したものは、読解を【】内の文献によったものである。

以上の文献を、その扱う分野によって、下記のように分けることが出来る。重複する大工書は、篇あるいは章によって、異なる分野にまたがる記述が認められることによる。「全体と各部」の分類は、建築の各部を分解図や仕口図あるいは部材構成図として描き、建築あるいは建築各部の全体像を示そうとする大工書で、断片的な仕口図にとどまらないものを対象とした。

木割術大工書

『匠明』1608年、『武家雛形』1655年、『匠家極秘伝 乾坤』1727年、『新撰大工雛形』1757年、『工匠技術之懐』1882年

規矩術大工書

『秘伝書図解』1727年、『匠家極秘伝 乾坤』1727年、『方圓順度』1788年、『匠家矩術要解』1833年、『匠家矩術新書』1848年、『独稽古隅矩雛形』1857年

継目仕口大工書

『匠家仕口雛形』1728年、『御作事方仕口之図』1729年、『継目仕口扣』1793年、『大工雛形 規矩鑑集 蒂指口』1800年頃、『蒂指図』1816年以降、『御殿向作事堅

図解』江戸時代後期

全体と各部

『御作事方仕口之図』1729年、『御殿向作事堅図解』江戸時代後期、『今西氏家船繩墨私記 乾』1813年

辞書、往来物大工書

『増補 紙上壁紙』1790年、『葺指図』1816年以降、『万宝柱立番匠往来 全』1823年、『番匠作事往来』1850年頃

その他

『土蔵戸前雛形』1882年、『数寄屋工法集』1686年

このように、それぞれの分類について、その中での初出に近いものから後期のものまで、各年代をカバーするように大工書を電子テキスト化することに努めた。また、上記の大工書分類には、絵様雛形、棚雛形、建具・欄間雛形、組物集、瓦集などの大工書が含まれていないがそれらは画像主体で文字の少ない大工書であり、用語の探索が比較的容易であることから、今回は電子テキスト化を見送った。

2) 続いて、近世・近代初期の個々の建築用語に関するデータベースの作成を行った。前述の通り、近世・近代初期の用語には、今日に伝えられていない用語が多くあるが、先ず『日本建築辞彙』の中に、著者中村達太郎が重要と考えて集録した用語の中から、現代の用語解釈から見て不明快なものについて、データベースを作成することを行った。すでに触れているように『日本建築辞彙』に採録されていない近世建築用語の多いことは明らかであるが、同書は近世・近代初期の建築用語と現代の建築用語とを結びつける重要な結節をなし、先ず同書の採録する用語から着手することが適切であると考えた。

探索すべき用語のデータベースの作成に先だって、次のような事を行った。

- (1) 電子テキスト群の中から、該当する用語を探索
- (2) 他の近世・近代初期の大工書類、随筆類からの用語探索
- (3) 各部構造などに関する研究文献における、用語に対応する部分、技法などの解説探索
- (4) 古辞書、辞書類からの用語探索
- (6) 古記録、仕様書、普請帳などからの用語探索
- (6) 上記諸文書、文献などに見られる図版類の電子画像データ化
- (7) 専門職人からの用語に関する知識の聴取
- (8) 用語に関する部位、部材等の実例の写真撮影

データベース作成のための画像データは多くの場合、部分的、断片的な情報であるために他の部材などとの関連やその概念上の位置づけが不明確となりがちである。そこで、データベースの作成とは別に、全体像との関連で各部を把握理解するための参照画像の蒐集をおこなっ

た。また、データベースの作成は、上記8項目全てでの探索、検討を経て完成したものではないことを断っておきたい。探索する用語によって、どのような探索が必要であるか、あるいは可能であるかは様々であるからだ。

さて、図1-1 は作成したデータベースの一例である。この「はへがしらぼそ」の例によってデータベースの構成を説明すれば、先ず対象とする用語の呼称を『日本建築辞彙』に従って、仮名表記と漢字表記に記し、同書の解説を付したものを基本的なデータとする。次に『日本建築辞彙』の解説、図を手がかりに、類似する呼称、形態の仕口を、上記の8項目によって探索し、得られたデータ(論拠)とそれに基づく考察(調査の結果)の二段階に分けてデータベースに記入している。

また、現代の読み方、意味分類によって検索できる仕組を加えている。分類とは建築の形式分類、部位分類、材料分類、技法や仕事による分類、関連職種分類の5つの分類軸である。各分類の項目の一部を紹介すると、形式分類では、寺院、神社、塔、門、住宅系、城郭など建築物の類別と、他に道路、外構、庭園なども加えている。部位分類では小屋組、梁組、軸組、床組、基礎地盤などの他に、より詳細な各部位に分類した。仕事分類では、木割り、規矩、継手仕口、絵様彫物、下地、計測規格、道具などの分類を設けている。

ちなみにこのデータベースからは「はへがしらぼそ」について次のような知識を得ることができる。『建築大辞典』では、おそらく『日本建築辞彙』に従って、胴付が斜めであることをクローズアップした記述を行い、その解説にとって不適切と思われる、割楔の例を削除している。しかし、データベースにある諸データを蒐集、比較した結果、胴付き面を斜めにするはこの仕口の要点ではなく、重要な点はむしろ割楔、あるいは先端が膨らんだぼそ形の形にあると推論できる。

以下にはデータベースを作成する上での上記(1)以外の主だった資料群について、その内訳を記しておく。

(2) 『日本建築古典叢書』(刊行済みの巻3, 5, 8, 9) (小葉田淳, 内藤昌監修, 1985~93年, 大龍堂)の四冊(その掲載する一部の大工書について、各所蔵図書館などから複製を行った)、『江戸科学古典叢書』(巻8, 16, 23, 35) (巻8は楠善雄解説, 他は狩野重勝解説, 1976~82年, 恒和出版)、『愚子見記』(平正隆, 17C半ば)、『堂かた』(鈴木重春, 1714年)、『勝好万代録 一, 二, 四, 六, 七』(神森作太夫, 1734年)、『俗説正誤 匠家必用記』(立石定準, 1756年)、『武家鎌倉図』(江戸時代中・後期)、『新撰早引 匠家雛形 三篇』(本林常将, 1851~75年)などの近世大工書。『和漢三才図絵』(寺島良安, 『東洋文庫』版)、『貞丈雑記』(伊勢貞丈, 『東洋文庫』版)、『嬉笑遊覧』(喜多村信節, 『日本随筆大成』版)、『家屋雑考』(沢田名

銅頭が脚の如く斜なる二(ほぞ)

調査の結果
 雄具類の短と組子の仕口に用いられる。「はしがしらほぞ」は脚付き面が斜めである点に特性があるのではなく、脚先が膨らんでいる点にあると思われる。近世大工書には、組子の脚先に脚根を付すものと(歴史的実例では「短」または「短一力子か」)、脚先自体を広めるものがあり、いずれも「はしがしらほぞ」類似の呼称を持つ。また、それぞれに対応する実例もある。いずれも脚付き面は斜めではない。

脚付き面を斜めにする事によって(脚先も斜めにする)、仕口の隙を見えにくくすることが出来るが、細く脚根の行を留めた脚根材では不潔ではないかと思われる。

「組目仕口」(江内(飛騨屋)、寛政五(1794)年)、その類を思われる「脚指図」(大沢實業、文化十三(1808)年以降)による「銅頭脚」の記載があり、「打込二種ひ脚大毛其細ク二ホルナリ」(戸隠子の銅頭脚二及さる事六彫像有テ打込二種ひ脚先ヒラクナリ)以上、脚下しは、若山滋、龍和齋編『日本建築古典叢書』近世建築一巻「棟法図形」大徳堂書店、1983年、115頁)の書込みがある。一方、「銅頭之図等」(清水家、江戸時代後期)には脚先を広めた「ハイ脚」が記されている。前者に類似する実例には、慈照寺東求堂、文明十八(1825)年、蓮生堂があり、後者に類似する実例には宝林寺弘院、寛文七(1727)年、蓮生堂とある。万福寺西方丈、寛文元(1721)年、明徳寺などがある。用語としては「番匠作事往末」(松野玄飛校、大徳園園圃、嘉永二(1829)年)、「銅」などの往末物に「組子銅頭脚力子」として現れている。銅頭については、一枚のほぞに銅頭を入れ、打込んだ後に二枚ほぞで見せる採築という簡略法であるとの説もある(藤取田中文男氏)。

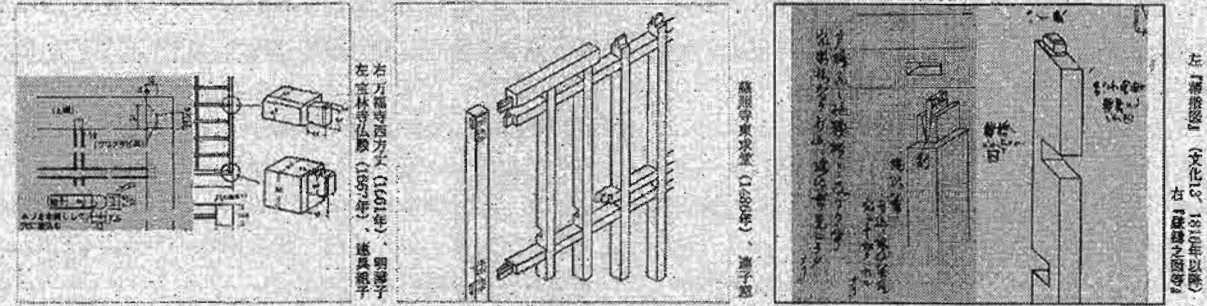


図1-1 用語別カード型データベース

垂、『故実叢書』版),『筆の御鑑』(田沼善一、『故実叢書』版),『守貞謾稿』(喜多川守貞,朝倉・柏川校訂の東京堂出版)などの随筆類。『日本家屋構造』(斎藤兵次郎,1904年),『大建築学』(三橋四郎,1904年),『普通木工術』(文部省,1899年),『工業字解』(石橋絢彦編),『釘』(安田善三郎,1916年),『明治前日本建築技術史 新訂版』(日本学士院,1981年),『増訂工芸志料』(前田泰次校注,1976年)などの明治以降の建築関連書。

(3) 天沼俊一,福山敏男,太田博太郎らによる用語解説に関連する著述,『文化財建造物伝統技法集成』(文化財建造物保存協会,1986年),『古社寺調書綴』(文化財建造物保存協会,1989年)などを参照した。

(4) 『倭名類聚抄』,『伊呂波字類抄』,『邦訳日葡辞書』,『時代別国語辞典上代編』,『時代別国語辞典室町時代編』など。

(5) 国宝,重要文化財建造物修理工事報告書所載の仕様書などを幾つか参照した,また古記録を編集した文献『古事類苑』,『日本林制史資料』,『大日本古文書』,『鎌倉近世史料』などの一部を参照した。

(6) 上記の諸大工書,文献などから700余の画像を,また『日本建築辞書』の570の画像を電子化した。

(7) 田中文男(大工,東京都世田谷区) 喜多明雄(石工,兵庫県伊丹市) 野村武男(石工,東京都大田区) 新保正一郎(左官,東京都新宿区) 岡本幸雄(左官,兵庫県伊丹市) 石川光宏(左官,群馬県新田郡) 前田康夫(指物師,東京都北区,故人) 前田喜平(指物師,東京都北区) 大村進(指物師,大阪府川西市) 森田秀臣(瓦葺師,東京都豊島区) 小林章男(瓦製造,奈良県奈良市) 渡辺益美(瓦葺師,大阪市生野区) 稲田光明(漆塗師,東京都台東区) 大河原勝(漆塗師,東京都文京区) 安井勇(塗装職,東京都品川区) 望月達雄(板金職,東京都豊島区) 山本清治(彫,東京都墨田区) 池上佐久刃物製作所(刃物,東京都中央区)の各氏に聴取を行った。この紙面を借りて,聴取に応じてくださった諸氏に深謝したい。

本調査研究の目的は,近代初期にあらわれる建築用語に関する基礎資料の蒐集と,そのデータベース化である。その様な理由から,対象資料の総合的な性格,時代的特性について論じることは尚早と考えられる。しかしながら作業を進める中で把握された,個別資料についての試論を提出することは義務でもあろう。そこで,本報告は,蒐集,取材した資料から,第2章では,大工書の電子テキスト化に伴う成果として,近世にあつては類を

見ない建築辞書であった『紙上蟹気』について、電子テキスト化をすすめる中で、得られた研究仮説について紹介する。『紙上蟹気』には一見すると不思議な用語配列が見られる。その説解を通して、著者溝口による用語の分類編集方法を探り、さらに建築を概念的に構築することへの問いへ、論究を深めようとする研究である。第3章は、用語情報を蒐集する方法の一つとして職人への聴取を行っているが、そこで得られた近世・近代初期の用語から現代の用語へと変化を、近代的技術の導入による語意の変化、語意の拡張（包括）、中断した伝統技術の用語の現代的再生という三つのタイプに分けて、比較考察した事例を紹介する。第4章は、諸大工書や、聴取によって蒐集した用語をデータベースとして作成する中から得られた、語意の変化や新しい用語の出現に関して得られた個別的知見を、近世初期、中後期という二つの異なる時期の事例によって紹介する。各章の担当は、1章は源、2章は中谷、前川（研究協力者）、3章は三浦、4章は源である。

2 「又作ル」からみる溝口若狭林卿『紙上蟹気』における用語連関の性質

2.1 『紙上蟹気』という辞書

『紙上蟹気』は溝口により宝暦八年に書かれ、寛政二年に刊行された日本初の建築辞書である。本書以前に、『倭名類聚抄』や『節用集』などに部として建築に関する用語は取り上げられてきたが、建築辞書として独立したものは本書が初めてと考えられる。本書は1620項目、約2300語、を収録しており、その構成は35部に及ぶ意義分類部と42部のイロハの部とからなる。本書はそれまでの辞書（現代を含んでも）の構造からは捉えることができない特異点をもっている。それは第一には、原則的にそれぞれの用語には意味が書かれていないという点であり、第二にイロハの部であっても第二音以下の配列がイロハ順に沿っていないという点である。序文を見ると、溝口は「且つ聞く、蟹気海上に於いて、楼台の形を為すと謂う」と述べ海上における蟹気楼の存在をあげ、「宮殿楼閣及び民屋橋牆と雖も、盡く執つて以て凡そ二千三百餘銘、之を著わし、紙上に紙上蟹気と言う」と本書の題名に込められた意図を語っている。つまり溝口は用語を言葉によって解説し、意味を与えることに重きを置かず、第二音以下の用語の配列によって、現実とは別の平面上に、いわば建築を透明な記号体系として構築することをめざしていたのではないのだろうか。

さて、こうした溝口の意図が現実はこの辞書に実行されているとするならば、それぞれの用語に対してなんらかの連関（抽象的な建築概念を獲得している可能性すらある）をもたせていることは自明であると考えられる。そして、そうした用語連関を形成するためのものとし

て、先に触れた、いろは順ではない語配列に何らかの意味を見いだすことは可能であろう。つまり、それぞれの語は紙上に建築を構築するしかたで並べられている。しかし、すべての語を扱うことは筆者の能力を超えるため、本研究では次の点、用語間を結ぶ語が挿入されているときの用語配列に特に注目してみた。なぜなら、用語間に挿入される記号「○」が、次の用語へ移ることを表しているのに対して、特定の語法を挟んで、前後に二つの用語が連ねられている時の用語配列に、より明確に用語連関を形成しようとする溝口の意図が込められていると考えたからである。

そうした用語間を結ぶ語の種類は大きく次の3つに分けることができる。

- (1) 「又云ウ」 例「板厨トダナ^{又云}戸棚」
- (2) キーワード 例「掖障子^社倭様ヲヨウ」
- (3) 「又作ル」 例「彫入^{ホリ}コミ^{又作}込^込鑲入^{ホリ}イレ」

「又云ウ」は主に同一の部位、部材などに対する別種の表現（同種異表現、同義語に近い）、また希には異体字を小文字の「又云ウ」を間に挟んで、示すためのもので3つの中でその性格が一番分かりやすいものである。「キーワード」は前の語と後ろの語を何らかのかたちで結びつけるために使われていると考えられるが、未だ明らかでない。最後にこの研究で主として取り上げる「又作ル」は、以下少し詳しく考えてみたいと思う。

2.2 「又作ル」

まず「又作ル」は「又云ウ」に比較して多くの場合、例のように、「入」（ルビでコミと読ませている）を「込」に置きかえるなど、続く文字が異体字であることを示す表現として考えることができる。その一方、同種異表現という「又云ウ」と同じ用法を含んでいるものもある。例を挙げると、「野隅木^{又作}ル^ル櫓」と記す箇所があり、「隅木」の別表現である「櫓」を表している。いずれも、見出し語の後に、小文字を使って同種異表現や異体字が「又作ル」を介して並列することは、ほぼすべての事例で見受けられることができる。

しかしそれだけではない。もし小文字表記の「又作ル××」が並列表現のみに使われていたとすれば、「又作ル××」に続く用語の更なる連関（ここでは「野隅木」と「櫓」という用語の関連）をどう捉えればいいのか、という疑問が生じる。「紙上蟹気」において用語と用語の間には○が書かれており、どこで文意が切れているのか表現している。しかし上の例では「野隅木^{又作}ル^ル櫓○櫓」とはなっておらず「野隅木」と「櫓」は切れていないと考えられる。つまり溝口がそこに何らかの関連をより明確にもたせていると考えることができる¹⁾。

ここで、「又作ル」の性格をある程度決定することができる。

・異体字を表現するもの→「又云ウ」の性格（同種異表現）と対になるもの

・用語間に明確に連関を与えるもの→紙上に建築を構築するための助けとなるもの

以上のような複合的な働きを持たせるために「作ル」という語を用いたように思われる。

次に、「又作ル」が与える用語間の関連を事例から推測すると、大きく次の3つのパターンになる²⁾。

1 ある部位周辺の構成

2 構法的共通性

3 性質、形態の類似

これに次の3つを加える。

4 「又作ル」で終わる

5 連関不明

6 用語自体の意味が不明

「又作ル」は伊之部から須之部まで全848項目中、54項目存在している。以下この54項目のうち3例をとりあげ上の1～3のパターンによって分析する。

2.3 事例分析

1) ある部位周辺の構成

ここでは波之部にある「梁ハリ俗_ッ作ル_ニ梁_ニ柱欄額ハシラヌキ俗_ッ作ル_ニ貫_ニ梁夾ハリバサミ又作介鉢巻ハチマキ土蔵ノ軒袴腰繼ハカマコシツギ茅葺陸ハマユカ今云濱床」という項目を事例として取上げる。まず最初の語は「梁」から始まる。次に「俗_ッ梁_ニ作ル_ニ」とあり次の「柱欄額」に続く。「柱欄額」の意味は『日本建築辞彙』（以下、辞彙）によると「はしらぬぎ（柱貫） 頭貫と同義に用いる人あり」と記され、「頭貫」は「かしらぬぎ（頭貫） 柱の上方の繁ぎとなる横木…」とある。また次に「俗_ッ作ル_ニ貫_ニ」とあり「梁夾」につ

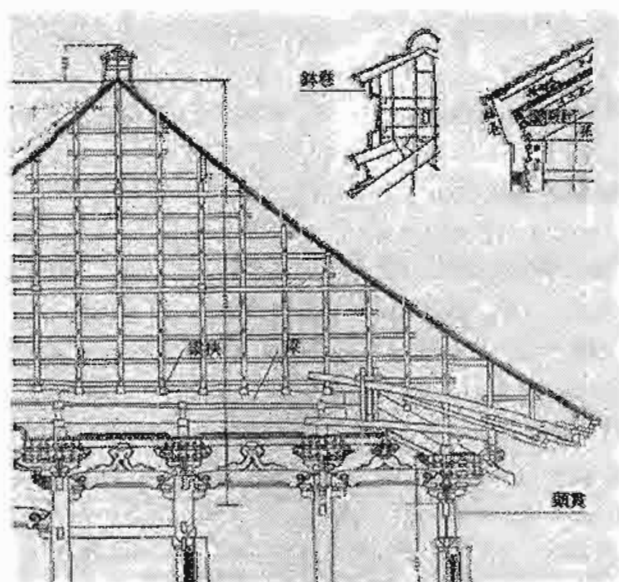


図2-1 左小屋部（延暦寺根本中堂、1640年）
中箱棟部（延暦寺転法輪堂、昭和修理の仕様）
右蔵（『明治前建築技術史』）

ながる。「梁夾」は辞彙によると「はりばさみ（梁挟） 小屋梁より隣の小屋梁へ掛渡しある木にしてその繁ぎとなるもの…」とある。次に「又作介」とあり「鉢巻」に続く。「鉢巻」は同じく辞彙によると「はちまき（鉢巻） 土蔵もしくは箱棟などの軒下にありて、平壁より突出せる細長き平面をいう…」とある。さてこれら4つの用語はそれぞれ屋根の小屋組みないしその周辺に使われるものであり、これらの用語連関からある種の図（例えば図2-1）が浮かびあがる。

2) 2構法的共通性

次に構法的なつながりを考える。事例として波之部から「脚衣板ハバキイタ又_ッ作_ル紐_ニ這附ハイツク」という項目をあげる。まず最初にくる用語は「脚衣板」である。辞彙によると「脚衣板」は「はばきいた（巾木板） はばきの木製なるもの…」とある。「巾木」は「はばき（巾木） 門内壁の最下部にありて床に接する化粧板…」とある（図2-2）。

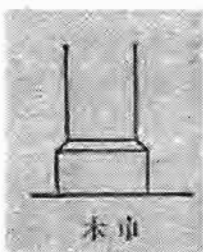


図2-2 巾木

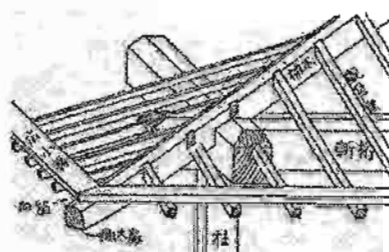


図2-3 配付垂木

次に「又_ッ作_ル紐_ニ」とあり「這附」と続く。「這附」は辞彙では「配付る」でありその意味として「はいつける（配付る） 木を他の木の横面らへ斜に取付ること…」とある。ここにおいて2つの用語は先のように明確な図が描けるわけではないが、明らかに繁ぎをみることができ。まず「巾木」が板、即ち木を壁や柱に「取付ける」ものであるという点は、「配付る」がある木に別の木を「取付ける」という点と同様であろう。また、「配付け垂木」（図2-3）は、軒隅部で隅木に斜めに取り付け垂木であり、配付けられた垂木はその隅木側の末端を斜めに殺いでいる。この形態が図2-2のような幅木における断面と共通性があることを指している可能性も考えられよう。こうした2つの用語の連関により、幅木が取付けられていく様が頭に浮かび上がることとなる。

3) 3性質、形態の類似

ここでも波之部から「發草ハツソウ俗_ニ作_ル八雙_ニ拵_出」という項目を取り上げ分析をおこなう。「發草」は辞彙において「八双金物」として掲載されている。「はっそうかなもの（八双金物） …門扉又は板唐戸などに横に取付けある物…」とあり、の門戸の留め具をさす（図2-

4)。次に「俗_二作_ル八_二雙_二」とあり、「拵出」に続く。「拵出」は辞彙では「勿出」とあり、その意味は「はねだし（勿出）足場板などの端の支えなき部分…」とある。この2つの用語のつながりは、近世の門の八双（図2-5）を見れば明らかであるが、八双によって支えられた門戸の先端は支えのない状態である。つまりその状態は「はねだし」の状態と考えるとよいだろう。

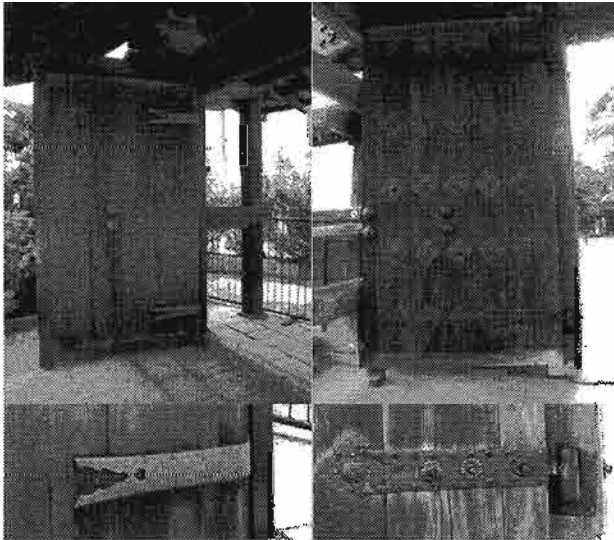


図2-4 西郷寺山門,1360年代
扉上下に軸受

図2-5 瑞龍寺総門,1650年代
八双による持出し

2.4 結論

以上見てきてように、「又作_ル」には用語連関を作りだす意図が含まれていることが確認された。また、その連関から読者は何らかのイメージ＝構築物を想起することが可能であることも上の分析から確認することができた。しかし、本研究では紙上蟹気における用語配列の意味すべてを解明できたわけではない。これに関しては今後研究の必要があり、そこからさらなる用語連関の分類を発見することが可能であろう。さて、近世期とくに元禄期以降は農学をはじめとする技術学や経験的実用科学が画期的に発展した時期であることが指摘されている²⁾。そのためこの時期はそうした新たな知識を体系付けるために辞書的なものが要請されるようになった時代でもある。『紙上蟹気』の成立要因がある面ではそうした時代背景に求めることは可能であると考えられるが、本研究で見えてきた溝口の意図、すなわち紙上に建築を作りだす、という極めて抽象的な側面は、そうした近世期における合理的・実践的・科学的性格にはおさめることができないものである。ではこうした側面をどう捉えればよいのか？またこうした特異な性格を持つ本書がその後どのような影響を与えたのか？（もしくは与えなかったのか）などは興味の尽きない問題である。このことに関してはさらに今後研究を進めなければならないだろう。

紙上蟹気を研究するにあたり、考え方、用語、資料提

供の面で、田中文男先生に配慮いただいた。記して謝意とする。

3. 職人からの聴取調査

3.1 聴取の方法など

この章では、職人の方々への聴取調査について報告する。聴取により今日用語と近世用語とを比較することがその目的である。

そこで、近世の建築用語の集成に力を尽した建築辞書『日本建築辞彙』を手掛りにすることにした。その語彙データベースの作成がある程度整ってきた段階で、その中から聴取用語を選んだ。例えば瓦職の聴取で準備した用語は「あしもと、いとまる、うつぼがはら、かけがはら、きくがはら、ささらめ、そで、たにめんと、ちごむね、つけのし、つつみがはら、つばがはら、どあぬり、とねまるがはら、ともゑがはら、ほんがはらぶき、わだち」である（仮名表記は『日本建築辞彙』による）。

1章に記載した職人の方々から聴取調査を行ったが、大工技術に関する近世用語は比較的文献などで残っている。そこで、できるだけそれ以外の技術を優先させたいとの気持ちから、対象が大工以外の職種に偏ってしまったきらいはある。聴取は今後継続していきたいと考えているので、その時点で不足する聴取を補完していきたいと考えている。

聴取調査は概ね以下の手順で行った。準備した用語を提示し、自ら使ったことがあるか、あるいは使っているのを聞いたことがあるか、書かれたもので読んだことがあるかを質問する。回答が否定だった用語についてはそれ以上触れず次の用語に進み、肯定の回答があった用語は、使用された時の語意を聴取り記録する。その上で改めて『日本建築辞彙』の記載を紹介し、選択した用語にとらわれずに経験や知識の話聴取する。選択した用語の語意を基に聴取を行うと、語り手の職人が既知の技術をその用語に当て嵌めてしまう可能性があるからである。

3.2 用語と技術の変遷

職人からの聴取を定量的にまとめ、今日用語と近世用語の比較を考察することは、現在の調査段階では困難である。聴取調査の対象である職人の母数がまだ少なすぎるからである。しかしこのような聴取調査を継続すれば、技術の変遷と術語の語彙の変遷を比較考察しうる期待が見えた。わずかな機会の聴取ではあったが、これらを通していくつかの興味深い事例を知ることができたからである。

いずれも近代化の中で、昨日までの技術が今日に推移するに従って、術語の語意のニュアンスも変わってきているという事例である。強いて分類すると、以下のような三つの類型が現われてくる。

一つのタイプは機械化などによって技術が変遷し、それによって語意のニュアンスも変わってきた場合。同様に伝統的な技術が新しい技術の導入で一般化していく過程で、用語がそれらの広がった技術をも包括し、語意も拡大していく場合もある。これが第二のタイプ。伝統的な技術の中には近代化の下部構造には馴染まず消えていったものもある。今日に甦らせた時に技術自身は変容していても、かつての名称が用語としては生き続ける場合が三番目のタイプである。

いずれも、近世から今日への技術や用語の変遷ではなく、昨日から今日への微妙な推移ではあるが、これらの具体的な例をここに報告しておきたいと思う。

3.3 技術の変遷により、語意のニュアンスが変わった事例 - 「合口」

『日本建築辞彙』では「あひくち（合口）」を「石積に於て豎目地の一部にして壁の表面に近き部分をいふ。〔合口二寸通り切合せ〕とは壁面より二寸奥迄は目地を丁寧に加工せよとの意なり。」と説明し、豎方向の合せ目に限定し、水平方向の接合の口元は「かさねあひくち（重ね合口）」と呼び用語を使い分けている。『建築大辞典』では豎方向、水平方向共に「合口」と呼び、豎方向は「豎合口」、水平方向を「重ね合口」と細分しているところから推察すると、学術的にはこのように、より厳密に定義されるようになってきているのかも知れない。しかし今回の聴取の範囲では、いずれの職人も「合口」を石の合せ目で豎方向に限った部分についての用語として使い、「重ね合口」と区別していた。

石工の野村武雄氏からの聴取の概要を以下に記す。

「石積み合口や重ね合口を切り合わせて仕上げるには、まず目地の面を上にして外面を手前にしてピシヤンや鑿で凡、その面を造る。平にする必要のない奥の方はぶつからない程度に野面に残しておき、これを『からしておく』と言う。合口は両刃または鑿で小叩きに仕上げるが、この時、口元は上から叩くのではなく、石を返し外面を上にして垂直に鑿を当てる。石の角を壊さない配慮である。」

手仕事で加工していた時代の技術での話である。従って『日本建築辞彙』で定義されるように、豎目地のうち「壁の表面に近き部分」、すなわち合わせるためにより精細な加工を要する部分を指す術語が「合口」なのである。

しかし、塀などの石積みでは裏面まで見せる仕事が必要される。また、石の仕上に機械が導入されるようになると、石の側面全てを仕上げる方が手間がかからなくなった。そこで「合口」も「壁の表面に近き部分」のみならず、積石の隣の石と接する側面全体を表現するニュアンスで使われるようになりつつあるようだ。

石工の喜多明雄氏の聴取では、ご自身は『日本建築辞彙』に掲載される意味で「合口」を理解しているが、職人の間でも側面全体のニュアンスで「合口」という用語を使っていることがあるようだと言っていた。

広辞苑などの国語辞典で、普通用語としての「アイクチ」を引けば、「物同士が密着するところ」の意味である。従って人間同士が密着すると「話が合うこと、話の合う仲間」で、鞆と柄が密着すると「匕首」になる。同様に術語としての「合口」も本来は隣り合う「石同士が密着するところ」との意味だったろうと推測するならば、『建築大辞典』の記載のように、豎横両方向に「合口」の語を用いたり、接合する側面全体をも「合口」と呼ぶ感覚をも首肯できるような気がする。

3.4 伝統的な技術が一般化していく中で、元の用語がそれらの広がった技術を包括していく事例 - 「ステイン拭き」

前項の事例は近代化の過程で生産手段の変化に伴い術語の語意のニュアンスも変わってきた一例だが、塗装職の安井勇氏（彩晃社）からは、伝統的な技術を今日の生産システムの中で普及させようとした建築家と職人が協同した努力の成果を聴取することができた。「ステイン拭き」の話である。

一般に木材の素地を着色する液剤がステインだが、特にプリマ油、ボイル油などに着色剤として油溶性染料を溶解せしめたものがオイルステインである。『日本建築辞彙』にはそのいずれもが載っていないが、一般的にはビヒクルとして最終塗膜に使用される「ワニス」の項目があり、振り当てられた「假漆」の漢字から、この塗料に対する当時の評価を窺い知ることができる。

日本の伝統的な代表的な色付け手法としては漆塗、丹塗、久米造塗、渋塗が知られているが、拭き漆のように木理を表わす「ステイン拭き」として知られていた塗装法がある。ベンガラ、柿渋、掃墨（灰墨）、酸化黄などを亜麻仁油に溶いたステインを塗装し拭き取る手法で、今日でも亜麻仁油にボイル油と塗料シンナーを加えて溶剤とし、この手法が伝承されている。安井勇氏はこの塗装を自らの「ステイン拭き」と区別して、京都風「ステイン拭き」と呼ぶ。京都の数寄屋建築などで使われてきた塗装技法だからだという。京都風の「ステイン拭き」では伝統的な着色剤を使用する。それらは左官技術で使われてきた着色剤と同じ顔料である。

この技術を合理的に簡略化し、普及させようと試みた塗装法が、清水一、大熊喜英らの建築家と彩晃社の先代（安井勇氏の父）が協力して考案した彩晃社流の「ステイン拭き」である。この塗装法は水澤文次郎が好んで水澤工務店の仕事の中で活用したところから水澤流の「ステイン拭き」とも呼ばれている。

建築家と職人の工夫はその着色剤を近代的な所産である調合ペイントに置き換えたところにある。黄、赤、黒色により調色、黄色は特に赤口の黄ではなく黄口の黄を使い着色し、プリマ油（桐油）を溶剤とした。今日ではプリマ油の代わりにボイル油を使用する。あるいはプリマ油にボイル油を混ぜたり、さらに塗料シンナーを混ぜたりもしている。調合ペイントとは、合成樹脂が入っていない既調合のペイントのことで、一般にはOP.で表示する（対して、今日一般的に使われている合成樹脂ペイントはSOP.、さらに細かいフタル酸樹脂ペイントはFOP.で表記される）。

彩見社ではオイルステインとして市販されている塗料は使用しない。市販のオイルステインには着色剤として白色のベンキが入っていて、そのために色が濁り、木理が立った仕上がりにならないからである。『日本建築辭彙』において「ワニス」を「假漆」と書いたように、近代における木部の塗装は漆塗を範にしていたのではないかと思われる。

従って木理を活かして塗装しようとした「ステイン拭き」の場合にも、拭き漆のように木目が透いて浮き立つような仕上がりを求めている。広葉樹の場合には、木目を際立たせるために、予め丁寧にウツクリをかけることもある。仕上げにはワックスで艶を出し、その効果で一層木理が立つのだが、四種類の材料を混合したそのワックスの配合は企業秘密だということである。

ちなみに今日、一般に「ステイン拭き」と呼ばれている塗装法では、市販のオイルステインを基剤として顔料の合成樹脂ペイントで調色し、塗料シンナーで濃度を調整している。京都風も彩見社流も一般的なステイン拭きも、いずれもが「ステイン拭き」と呼ばれている。これは技術が普及する過程で、一つの用語が様々なスペックを包括していった一例であろう。

3.5 一端途絶えた技術が復旧された時に、技術のスペックが変わっても、旧来の用語が再び使われている事例 - 「渋塗」

『日本建築辭彙』には「柿渋」に関連した用語がいくつか載っていて、その説明も詳細に渡っている。同著よりは25年ほど新しい『アルス建築大講座』の建築材料編でも、中村達太郎はわざわざ「渋」の節を設け、「温故知新は吾人には必要なことである。」と明治初年における渋塗方法を図解している。

こうした丁寧な柿渋の紹介は、渋塗、渋墨塗などの技術が当時のごく標準的な技術だったからであろうか、あるいは、近代塗装の普及によって渋塗のような伝統的な技術が途絶えるのではないかという実感が中村達太郎にあったからだろうか。そのいずれかは定かではないが、防腐効果がその特徴であった渋塗、中でも灰墨を混ぜた

渋墨塗はクレオソートの出現で急速に姿を消すことになる。

以下は前項同様、彩見社の安井勇氏から聴取った渋塗のスペックの概要である。

「柿渋塗（渋塗）はベンガラ、チャンパー、酸化黄、灰墨（煤玉、松煙）などを希釈しない柿渋に溶かして着色した上に、空渋を数回塗って仕上げる伝統的な塗装方法である。空渋の回数が多いほど仕上がりの艶がでる。

かつては銭湯の煙突のススを落としたものが「煤玉」と呼ばれ市販されていた。粉だがずいぶん重く、一般の灰墨よりもキメが細かく油で練るとコクのある色が出た。銭湯の数は減少し、今日では煤玉の入手は不可能だろう。ベンガラには赤っぽいものから朱赤っぽいものまで多種があり色味で使い分けていた。アンバーは天然の褐色顔料で、赤口と黄口がある。成分は二酸化マンガンおよび珪酸塩を含む水酸化鉄。塊状で産出された原石を粉碎し焼いて作る。

これらの着色剤は柿渋には溶けずらく、顔料の粒が残っていると、それを刷毛が引っ張って、塗りむらの原因になる。そこで着色剤を調合する時には少量の酢を加えた柿渋でよく練ったうえで溶かしていくと、両者は均等に混じり合う。

「渋塗」では塗装時に柿渋に水を混ぜて希釈するようなことはしなかった。柿渋で塗装する主要な目的はその防腐効果にあり、希釈するとその効果がほとんど失われてしまうからである。しかし、希釈しないで柿渋を塗ると塗りむらが著しく、そこで「水うち」という柿渋を塗る前に下地の木部をサッと一様に水で濡らしておく一手間を施す。そうすると、木は柿渋が浸透する前に水を吸い、柿渋の吸い込みは均等になる。その結果、色むらや塗りむらを防ぐことができる、という伝統的な知恵である。」

江戸の街並みを特徴づける黒塀の塗装の一法が灰墨を柿渋に混ぜて塗る渋墨塗だったようだ。この他、亜麻仁油に灰墨を混ぜたステインで塗る手法もあったようだが、いずれの場合にも、十分に着色できた後に、顔料を混ぜない柿渋（これを空渋と呼んでいる）あるいは亜麻仁油をなんべんも塗って表面に塗膜層を付けて仕上げていたようである。左官職の新保正一郎氏からも、氏が小僧時代に親の手伝いで渋墨塗で黒塀を塗った経験を聴取ることができたが、同様の仕様である。その時には最低でも五回くらいの空渋を塗ったということだった。

このような渋はクレオソートやオイルステインに変わり、「渋塗」はほとんど衰退していた技術だったが、近年、自然素材の塗料として見直され再び使われるようになってきた。この時、柿渋の防腐効果よりも日が経つに

つれ色が付き艶が増すその表面的なテクスチャーが重視され、また安井勇が語る着色剤を溶かす時に酢を混ぜる知恵や「水うち」の手間が伝承されていない。

おそらく、柿渋の技法を今日的に再現しようとした時の試行錯誤の結果なのだろうが、雑誌などで「渋塗」、「柿渋塗」が紹介される時には、そのほとんどで、柿渋を水で希釈し塗重ねる技法として解説されている。あるいはそのような「渋塗」が継承されてきた地方があるのかもしれないが、この今日的な「渋塗」は、名称は同じでも、近世から近代初頭まで京都や東京で行われていた「渋塗」とは目的も仕様も異質な技法である。

前項の「ステイン拭き」は構法規定（仕様規定）の立場で読めば異なる技術を表わすが、性能規定で読めば同じ技術である。しかし「渋塗」はどちらの立場から読んでも異なった技術を示す用語なのである。

4 用語データベース作成に伴う幾つかの考察

4.1 中世末、近世初期の語義変化 —地覆について

語義の変化、新たな用語の出現は、実体である建築の変化を表している場合が先ず想像される。中世から、近世にかけて生じた変化の一つに、軸部最下部を固定しようとする様々な試みを挙げる事が出来るだろう。『日本建築辞彙』の中には、地（亀腹なども含め）に接する部材用語として「どだい土台」「つけどだい附土台」「わりどだい割土台」「がわどだい側土台」「ぢふく地覆」「ぢふくなげし地覆長押」「ぢなげし地長押」などの用語があり、接地しないものの「ぢぬき地貫」「あしもとぬき足元貫」「あしもとなげし足元長押」「あしかため脚固」などの用語もある。

著者中村達太郎には、積極的な用語の体系化の意図はないものの、各用語について、恐らく異なる大工書を典拠としたことによって、それらはその取付け位置、組み方、断面形状などが互いに異なる別種の部材として解説されている。ちなみに『日本建築辞彙』では、土台：建物の最下部の横木、地覆：門、高欄の最下の横木、地覆長押：柱最下の長押、地長押：板塀最下の長押、地貫：根太を兼ねる貫、などである。しかし、これらは違いを示しているようで、少し考えてみると、差異は不明快である。

例えば、土台とは別に、割土台（柱両側から取付ける一対の土台、対の一方で柱片側に取付くものが附土台）があり、とすると土台は確かに建物最下部の部材であっても、柱を受ける部材ではなくなり、割土台と長押の相違点は断面形のみであるのか疑問が生じる。また、『日本建築辞彙』の「さんろ一（山廊）」にある図の土台は、礎盤柱間の間にある部材と描かれているので、地覆との相違が不明快である。一方、長押は柱の側面にとりつく部材として考えていると、地長押は図によれば真壁

の板壁最下部にある横木で、当然柱間の間に描かれており、これも地覆との違いが不明快に思われる。

現在の『建築大辞典』では、土台：柱下部にあり、その荷重を受ける横架材（割土台の語は削除）、地覆：柱間の最下端の内側に入る横木、地覆長押ならび地長押：柱最下部を繋ぐ長押（長押は柱の外付け材）、というように、柱との位置関係によって互いを区別し、用語の矛盾が解消、整理されている。もちろん、本調査研究は用語間の矛盾によって『日本建築辞彙』の不備を指摘したいのではなく、むしろ近世の建築用語の多様さや矛盾を保存する辞典として、積極的に評価して捉えようとしている。

では、近世大工書類ではこれら柱下部の水平材はどのように称されていたのだろうか。先ずその前に、軸部下部について中世末、近世建築に起った変化を見るなら、中世の構造に比して、柱の下部同士を連結し、安定させようとする試みが様々に行われていたようである。古代には土間床の建築が多く、いわゆる地覆や地長押によって側通りの足元が固定され²²⁾、あるいはそれらによって建築の内、外部あるいは壁と地表面（基壇など）が見切られている。それに対して、中世仏堂などでは、貫架構の採用によって軸部架構が安定し、床を持つ建築であることもあって、柱脚下に水平材は用いられていない。

しかし、中世末から近世頃になると、柱下端に土台を敷く、柱下端を水平材で挟む、さらに挟んだ材を鉄栓によって固める、あるいは片側から外付けする、断面について挟む材が角材あるいは長押挽き断面であるなどの多様な下部の構法が現れている。図4-1は、日光東照宮本地

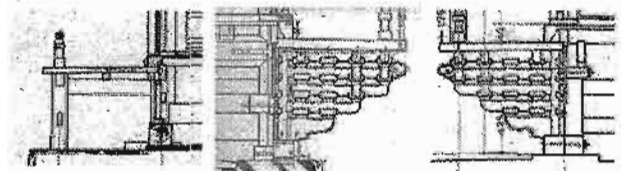


図4-1 左:本地堂,1636年 中:輪王寺大猷院本殿 右:岡澤殿,1653年

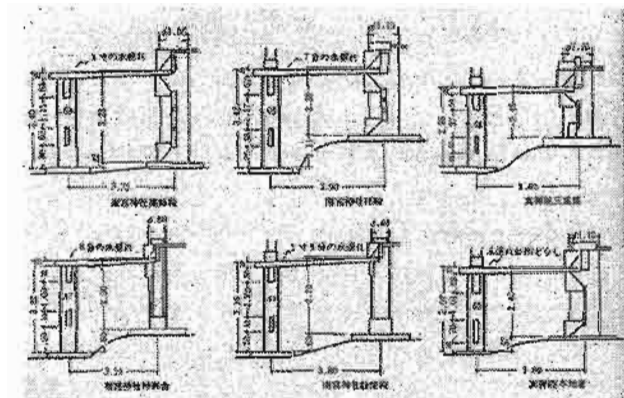


図4-2 南宮神社高舞殿 同左:拜殿 真禪院三重塔
同右:神輿屋 同左:勅使殿 同右:本地堂

堂ならば、輪王寺大猷院の縁廻り図、図4-2は1642年に再建された南宮神社および真禪院の諸建築（両寺社は明治時代以前は両部習合されていた）の縁廻り図で、その状況をよく表している（ただし、図4-2は当初の縁廻り詳細か否かは、図の引用元の『重要文化財真禪院三重塔修理工事報告書』では不明であった）。

それでは、このような様々な部材はどのような呼称を与えられていたのだろうか。それを、形状と高さに分けて、得ることの出来たデータとして紹介したい。表4-1は、様々な大工書、仕様書の中から、柱下部を構成する横架材の名称を表にしたものである。表中「外観」の「柱負け」は柱が立面図上、柱と礎石等の間に横架材が通って見える場合、「柱勝ち」は隣の柱との間に横架材が挟み込まれている場合、「高さ」は主に接地する横架材と、縁板上の横架材に分け、「断面」では「角完」は柱心に横架材心が合致する角材、「角対」は対をなして柱を挟む二本の角材、「角半」は上記対の一方が無い場合、「三角」は断面が三角形である場合（以下、三角対などは応用）を表している。

この表から明らかなように、近世の大工書等ではこれらの部材の呼称が一貫していない。同一の大工書であっても混用が見られる場合がある。現段階ではこのような実態を指摘することしか出来ないが、あえて一つの可能性を推測するなら、柱下部での横架材の様々な試行が平行して起っている段階であったことが、概念として体系的に規定することの困難さを招来していたのではないだろうか。

『愚子見記 九巻』などには例えば、「天井縁 同板 或 格天井 折上 亀尾 蛇骨 小組 裏板 棹天井 鏡天井ノ板」とタイプ別に語を並べる箇所や、「長押 内法一 天井一 地覆一切目一 半長押 腰一」と位置別に語を並べる箇所があり、体系的に細分化して、用語を整えようとする意図が感じられる。大工書の成立には、体系化への志向がそもそも潜在するものと考えられるが、にもかかわらず当時はまだ柱下部の横架材の用語化は困難だったのであろう。

4.2 近世半ばの語義の変化例 一柱貫と頭貫

『日本建築辞彙』には「はしらぬき（柱貫） 頭貫と同義に用ふる人あり」という解説があり、字面から現在の我々には小屋貫に対して、柱に組まれる貫全てを指しているようで奇異に感じられる。しかし、近世前半までは、この用語は今日の頭貫を表す用語であったことが大工書などから知られる。

まず、古代、中世には、『正倉院文書』（所収『大日本古文書 5』）において「柱貫」、『倭名類聚抄』に「欄額 波之良沼岐」、『伊呂波字類抄』に「欄額 ハシラヌキ 柱貫 同」、『三代巻』（1489年）（所収『愚子見記』）に「柱貫」、あるいは『阿部家文書』（1555年）（所収『明治前建築技術史』ただし原本不明）に「はしらぬき」である。また、近世前半においても、『匠明』（平内政信、1608年）、『武家雛形』（底本：瀬川政重、1655年）、『大工割方雑集』（1681年頃）『建仁寺派家伝書』（甲良宗賀、宗俊、宗員編著、1677~1710年）、『匠家仕口雛形』（甲良棟利、1728年）、『御作

表4-1 柱下部の横架材名称（勝負け、高さ、断面）

No	出典	建築種	文書中名称	外観	高さ	断面	備考
1	図：『聖家御藍圖』（甲良豊前宗賢、貞享（1685）年記、油上延世、寛延3~寛政1（1750~89）年写）、用語はその対応文書『聖家御藍木割完』（同上）による	講堂	地覆長押	柱負け	基壇上	三角対	
2	『大猷院結構書抜粋』（「大猷院結構書抜粋」は宝暦年間（1751~55）の修理時に、幕府大工頭大谷甲斐により作成された修理台帳）	大猷院霊廟本殿	地覆土台	柱負け	亀腹上	角対	断面の大きさの異なる二材の対、地覆・土台か？
3	同上	大猷院霊廟拜殿	土台	柱負け	その他接地	角対	鉄栓で二材を繋ぐ
4	『宝暦三年酉年日光御宮並御臨堂社結構書（東照宮蔵写本）』	東照宮本殿	地長押	柱負け	亀腹上	角対	
5	『匠家雛形 増補初心伝』（石川重寅、文化9（1812年））	忍問社	地覆	柱負け	亀腹上	角完	6寸3分×9寸4分
6	『宝暦三年酉年日光御宮並御臨堂社結構書（東照宮蔵写本）』	本地堂	土台	柱負け	その他接地	角完	
7	『宝暦三年酉年日光御宮並御臨堂社結構書（東照宮蔵写本）』	東照宮陽明門	地覆	柱勝ち	その他接地	角完	
8	『御作事方仕口之図』（甲良宗員、享保14、1729年）	（腰板影羽目）	（下）長押	柱勝ち	その他接地	角完	柱勝ち板塀では「土台」
9	『新撰早引 匠家雛形 三編』（本林常得、明治8（1875）年）	玄關脇節形塀	地長押	柱勝ち	土台上	不明	
10	図：『聖家御藍圖』用語：『聖家御藍木割完』（筆者、1に同じ）	三間山門 茶室	地覆貫 地貫	柱勝ち	その他接地	不明	
11	2に同じ	大猷院霊廟本殿	切目長押	柱負け	縁上	三角半	
12	『東照宮御結構書（東照宮蔵写本）』	東照宮神既	切目縁長押	柱負け	縁上	角半	
13	『工匠技術之遺』（河合信次、明治15、1882年）	三間社神明造り	地長押	柱負け	縁上	不明	
14	5に同じ	寺問社	（下）長押	柱負け	縁上	不明	
15	『堂社門』（甲良若狭棟利、享保8~20（1723~35）年）	大三間社	地覆ルとキリメ）長押	柱負け	縁上	不明	
16	10に同じ	鐘樓	地覆長押	柱負け	縁上	不明	

事方仕口之図」（甲良宗員、1729年）などに「柱貫」が用いられており、『愚子見記』（平正隆、170半ば）においても「欄額ハシラヌキ」であった。このように、古代から継続して近世前半に至るまで、頭貫は「柱貫」と称されていたのである。

ところが、近世半ば以降になると、幾つかの大工書で、柱貫と頭貫の両表記を掲げるものが現れるようになる。例えば、『匠家極秘伝』（広丹農父、1727年）の、図中に「頭貫」の文字と、そこへ「ハシラヌキ」の添書きを記す一方、「造堂式」の部において「柱貫八分厚サ四分也」と記す例がある。また、『新撰大工雛形』（木暮甚七、1757年）にも「頭貫」（巻二、唐棟門など）「柱貫」（巻二、唐八ツ足門など）の両表記が見られる。さらには、『聖家天台真言七堂図』（池上延世、1750～89年写し）に「頭（木貫）」が見られる一方、同じ池上延世の写本『聖家伽藍木割完』（1750～89年）には「柱貫」が記されているという例もある。

しかし、その一方で、『紙上屢気』（溝口林卿、1758年）では「柱欄額 ハシラヌキ」のほか、『勝好万代録七』（神森作太夫、1734年）、『大和絵様集』（立川小兵衛、1763年）、『縫目仕口扣』（辻内（飛驒並昌）、1793年）、『大工雛形 規矩鑑集 帯指口』（若杉家、1800年頃）、『匠家雛形 増補初心伝』（石川七郎左右衛門重甫、1812年）などでは頭貫は「柱貫」の表記であり、少なからざる大工書が旧来の用語を踏襲していた。

従って、この間が過渡期であったと思われるが、中でも特に興味深いのは、『帯指図』（大沢貞頼、1816年以降）の中で、図に「柱貫 頭貫トも云右之かたよろし」と書かれた添書きである。「右」とは柱貫のことであり、そこからは、筆者が旧来的なあるいは正統的な用語の「柱貫」を支持しつつも、「頭貫」の語を記入せざるを得なかった状況（あるいは意図的な言訳）が想像され、そこに用語が変化してゆく力を感じる。この過渡的な時期は作事方に替って小普請方が実質的に活躍してゆく時期にも重なっている²³⁾。これは用語の担い手の変化を表しているのか、現段階ではそこまで踏込んだ議論は出来ないが、この用語の変化は興味深い問題を提起している。

その後、近世末の大工書類、『番匠作事往来』（整軒玄魚校、大賀 範国図、1850年頃）、『匠家雛形』（本林常将、1851～75年）、明治期の『工匠技術之懐』（河合信次、1882年）などでは「頭貫」の語のみが用いられ、『匠家雛形 増補初心伝』と同じ図を示しながら『大工絵様 雑工雛形』（落合大賀 範国、1850年）では「頭貫」に替えられているなど、頭貫への移行が見られる。しかし大工書は増補、筆写などが行われるため、少なくとも明治前半にも『立川流匠家矩術 倭絵様集』（1894年）などに「柱貫」が使われていた。

あとがき

本稿では、この調査研究によって知ることの出来た、各用語に関する知識の一部のみしか報告することが出来ない。また、取上げた用語にしても、データベース化の対象とした用語が抱える問題を、典型的に表しているということでもない。用語の変質の背景にどのような建築をとりまく環境の変化があって、変質に影響を与えていたかは更に、今後の追求を必要とする課題だからである。

今、450余の用語に関するデータベースを作成したのだが、それを俯瞰的に論じる段階には至っていないし、また論じる視点、切り口もいろいろな可能性があるだろう。例えば、技術の変化、流派と用語、言葉の文字化、大衆化、訓詁学の発達など。しかし敢て、この作業を一段落させてその作業の経験から憶測で言うなら、語彙は徹底的に変化していったというよりは、幾つかの変化の節目があったように感じている。本調査研究を通して、中世末から近世初期、18世紀頃、幕末から明治初期さらには明治末を想定しながら、語彙全体の変化へ視点移して研究をすすめる段階に近づくことが出来た。

<注>

- 1) 用語連関を切るべき箇所では「A又作るBC」に対して「A又作るBOC」と表わしている。例、「蓋又作蓋ニ〇階段」。
- 2) 3つのパターンとは、建築各部を分類する方法とも換言でき、工匠の建築的概念を知る上で重要なとらえ方ではないかと考える。今後、研究の展開によって、5、6の中から他のパターンが導き出される可能性がある。

<参考文献>

- 1) 杉本 勲、近世実学史の研究、p40、吉川弘文館、1962
- 2) 工藤 圭章：古代の建築技法（所載『文化財講座日本の建築 2』）、第一法規、1976
- 3) 内藤 昌、近世大工の系譜、ベリかん社、1981

<図版出典>

- 図2-1（左図、中図）、4-1、4-2については各建造物修理工事報告書による
図2-1（右図）日本学士院日本科学史刊行会、明治前日本建築技術史 新訂版、野間科学医学研究資料館、1981
図2-2 中村達太郎、日本建築辞彙、丸善、1906
図2-3 渋谷五郎、長尾勝馬、日本建築、学芸出版社、1954

<研究協力者>

- Martin N. Morris 千葉大学建築学科助教授
田中 寛将 工学院大学建築学科大学院（当時）
前川 歩 大阪市立大学建築学科